HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『土佐日記』不審本文考（一）
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 170, 1（右）-19（右）
Issue Date	2023-07-07
DOI	10.14943/bfhhs.170.r1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90152
Type	bulletin (article)
File Information	07_170_Goto.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bfhhs.170.r1　　北大文学研究院紀要 170 （2023）

『土佐日記』不審本文考（一）

後藤康文

本稿は、現存『土佐日記』本文に散見される不審箇所について、青谿書屋本を底本にしつつしかるべき改訂案を提示するものである。なお、思いついたところから気ままに処理していくので、節番号の順に秩序はない。また、拙稿「『土佐日記』誤写考――〝貫之自筆本〟本文を疑う――」（久保朝孝編『危機下の中古文学二〇二〇』武蔵野書院、令三・三）および「続・『土佐日記』誤写考――再び〝貫之自筆本〟本文を疑う――」（「語文研究」第百三十四号、令四・一二）において取り上げた問題点については再述しない。

〔凡例〕

1. 問題箇所を含む青谿書屋本【本文】の掲示には、萩谷朴編『影印本　土左日記（新訂版）』（昭四三、新典社）を用い、その頁・行数を示した。

2. 本稿で参照する『土佐日記』の注釈書と論中における略称は次のとおりである。

・小西甚一『土佐日記評解』（有精堂、昭二六）……『評解』
・鈴木知太郎担当『日本古典文学大系　土佐日記　かげろふ日記　和泉式部日記　更級日記』（岩波書店、昭三二）……『大系』
・三谷榮一『角川文庫　土佐日記』（角川書店、昭三五）……『角川文庫』
・萩谷朴『土佐日記全注釈』（角川書店、昭四二）……『全注釈』
・松村誠一担当『日本古典文学全集　土佐日記　蜻蛉日記』（小学館、昭四八）……『全集』
・村瀬敏夫『旺文社文庫　現代語訳対照　土佐日記』（旺文社、昭五六）……『旺文社文庫』
・品川和子『講談社学術文庫　土佐日記　全訳注』（講談社、昭五八）……『学術文庫』
・今井卓爾『土佐日記　譯注と評論』（早稲田大学出版部、昭六一）……『譯注と評論』
・木村正中『新潮日本古典集成　土佐日記　貫之集』（新潮社、昭六三）……『集成』
・川瀬一馬『講談社文庫　土佐日記』（講談社、平一）……『講談社文庫』
・長谷川政春担当『新日本古典文学大系　土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』（岩波書店、平一）……『新大系』
・菊地靖彦担当『新編日本古典文学全集　土佐日記　蜻蛉日記』（小学館、平七）……『新全集』
・西山秀人『角川文庫　ビギナーズ・クラシック　日本の古典　土佐日記（全）』（角川書店、平一九）……『ビギナーズ』

・東原伸明・ローレン・ウォーラー『新編　土佐日記　増補版』（武蔵野書院、令二）……『新編』

3．現存主要諸本間（底本→底・藤原為家筆本→為・藤原定家筆本→定・日本大学図書館蔵本→日・近衛家本→近・宮内庁書陵部本→宮・三条西家旧蔵本→三）における本文異同については、『大系』および為家筆本を底本とする『講談社文庫』を参照して各節末の【校異】欄に掲げた。異同が見られない場合は「ナシ」と記した。なお、稿中でそれぞれの字母を確認する必要が生じた場合には、以下の文献を利用した。

・松尾聰『土佐日記（完）』（武蔵野書院、昭二四）→三条西家旧蔵本

・鈴木知太郎『影印本土左日記』（笠間書院、昭四四）→日本大学図書館蔵本

・前田育徳会『国宝土佐日記』（勉誠出版、平二一）→藤原定家筆本

4．『土佐日記』を含む散文作品の引用は『新編日本古典文学全集』に、韻文作品の引用は『新編国歌大観』『私家集大成』『俳文学大系』に依拠した。

一

【本文】

けふなみなたちそとひと〳〵ひねもすにいのるしるしありてかせなみたゝすいましかもめむれゐてあそふところあり京のちかつくよろこひのあまりにあるわらはのよめるうた　いのりくるかさまともふをあやなくもかもめさ

へたになみとみゆらむ　　（二月五日条・八三頁一行～九行）

【諸注の解釈】

×祈りつづけたお蔭で、やつと風の吹かない間があると思つて喜んでゐるのに、いつたい何だつて鷗なんかまでが、白く波のやうに見えたりするのだらう。／『古今六帖』巻三「鴨」の條に第二句が「鴨と思ふを」となつて、貫之の名で出てゐる。六帖もちよつと變つた歌集で、（中略）風間が鴨に化けるなどは、しかたないかも知れぬが、貫之が見たら驚いたらう。（『評解』口譯／語釋）

×海上の平穏を祈り続けてきたかいがあって、風の絶え間ができたと思って喜んでいるのに、いったいなんだって鷗なんかまで、立ちさわぐ白波のように見えるのだろう。（『大系』頭注）

×祈ってやってきた（甲斐があって）やっと風の絶え間だと思われますのに、変なことに、なんだって、鷗なんかまでが白く波のように見えたりするのでしょう。（『角川文庫』現代語訳）

×海上平穏を祈りながら来るそのかいがあって、折よく風がとだえてると思うのに、無闇と心配なものだから、鷗みたいなものまでが、わけもなしに白い浪に見えるらしい／（上略）「かもめさへだに」の「さへ」は、「添へ」の意から来た副助詞で、現代語の「……までも」にあたり、「だに」が現代語の「……でさえ」に当たる軽視の意を示す副助詞である。ゆえにこれを直訳すれば、「かもめまでさえが」となるが、それでは現代語として不自然になるので、「さへ」と「だに」とを倒置して、「かもめみたいなもの（だに）までが（さへ）」と口訳した。この歌は『古今六帖』巻三五三に、貫之の作として、第二句を「鴨と思ふを」となって入れられているが、それでは全く意味を為さない。

『六帖』の本文誤謬か。

（『全注釈』訳／釈）

×祈りながらやって来たかいがあって、風のやみ間になったと思うのに、変なことに、なんでかもめみたいなものまでが、白い波のように見えるのだろう

（『全集』口語訳）

・祈ってきたかいがあって、やっと風が絶えたと思ったのに、あいにくとどうして鷗までさえ、白い浪のように見えるんだろう／「さへ」は添加の副助詞。「添へ」の転じたもので、「までも」の意。「だに」も副助詞で、「さえ」の意。

（『旺文社文庫』現代語訳／脚注）

×〈海の旅路の平穏さを〉ずっと祈りつつ来て、ようやく風が止んだ合間と思って喜んでいるのに、いったいぜんたいわけがわからないが、なぜ鷗などまでが〈目の前にちらついて〉白波のように見えるのだろうか／（上略）「鷗さへだに」の「さへ」は現在の「……までも」にあたり、「だに」が「……でさへ」にあたる。助詞を二つ重ねて語調を強めている。この歌は『古今六帖』に貫之作としている。「いのりくるかもとおもふをあやなくもかもめさへたゝなみとみゆらん」（『六帖』第三鴨）。海上で遊んでいる鷗を、あのいまいましい三角波と錯覚するという、歌枕も和歌的技巧も詠み込まれていない鷗の歌を子供の作に仕立てている。

（『学術文庫』現代語訳／注）

×風が吹かないように祈ってきた、その風の止んだ間と思ってよろこんでいたのに、筋の通らないはなしだが、どうして鷗さえも白い波に見えるのだろう。

（『集成』頭注）

×祈ったかいがあって吹く風がやんだ合間に船を進めようと思うのに、どうして鷗までが白く群れ飛んで波が立つように見えるのでしょうか。

（『講談社文庫』現代語訳）

×風が吹かないように祈り続けてきて、今がその吹かぬ間だと思うのに、妙なことになんで鷗さえもが吹く風によっ

て立つ波と見えるのだろう。　（『新全集』口語訳）

×風が吹かないようにずっと祈り続けて来て、やっと風の絶え間だと喜んでいるのに、これまでさんざん波風に悩まされてきたから、おかしなことに、鷗までもが白波のように見えているのだろうね　（『ビギナーズ』通釈）

×風が吹かぬように祈ってきたのに、妙なことに鷗さえも立つ白波に見えるのだろう。　（『新編』脚注）

【批評】

焦点となるのは、第四句。ここで添加の副助詞「さへ」に類推の副助詞「だに」が接続しているのはいかにも異様ではなかろうか。これを正しく訳すとすれば、「までさえ」（『全注釈』『旺文社文庫』の二重傍線部）となるはずだが、それでは具合が悪いので、『全注釈』波線部に見るごとき奇妙な説明が施されるようになり、諸注挙句の果てに、「なんかまで」（『評解』『大系』『角川文庫』）「みたいなものまで」（『全注釈』『全集』）「などまで」（『学術文庫』）「さえも」（『集成』『新全集』『新編』）「まで」（『講談社文庫』）「までも」（『ビギナーズ』）などといった、不正確な訳文を宛てがって済ませるに至っている。

そこで試しに、韻文作品における「さへだに」を調べてみると、たとえば、

・ほとけさへだに恋をめさるる　（「守武千句」第十・九四六）

・かつら・苔などのおひまつはれるいは木のたぐひさへだにしかなるに　（「随斎諧話」序）

といった用例が見つかった。だが、荒木田守武の「守武千句」は天文九年（一五四〇）成立で慶安五年（一六五二）刊、夏目成美の「随斎諧話」は文政二年（一八一九）刊である。すなわち、これらはともにはるか後代＝およそ近世期の用例なのであり、「さへ」が本来持っていた添加の意を失くし類推の「だに」の義を担うようになって久しい時期のものであってみれば、ここでわざわざ相手にする必要はない。

そもそもの話、当該歌の「だに」が、「かもめ」という軽いものを挙げて重いものを類推させる表現である以上、その「重いもの」が想定されねばならないはずだが、「かもめ」を「なみ」に見立てるこの歌においてそれはもとより認めがたい。必要なのはあくまで「までも」という添加の語義のみなのである。念のためにいえば、右に見た後世の「さへだに」は、こうした語義の点からも問題にしなくてよいのである。

【本文改訂案】

実はこの歌、『古今和歌六帖』にも貫之作として次のような形で収められているのである（第三「鴨」・一四九三）。

いのりくるかもとおもふをあやなくもかもめさへだなみてみゆらん

右一首が『土佐日記』からの採録であることは確実だが、本文には異同がある（傍線部）。計三句のうち第二句・第五句に関しては、『六帖』の本文ではまるで意味が通らず、『土佐日記』の方が原形と判断してよい。第二句は下の「かもめ（＝鷗）」に引かれて「かさまと」が「かも（＝鴨）とお」に誤られたのであろうし、第五句は「と（止）」→「て

（天）」のよくある写し間違いである。その書写者の脳裏には、「鴨」と「鷗」とが仲良く群れ並ぶ、そんな海上の光景でも広がっていたのだろうか。

ところが、第四句だけはその逆なのであって、今はこの点に注目しなければならない。すなわち、『土佐日記』歌の第四句はもともと「かもめさへたた」であったものが、「た（多）」→「に（二）」の誤写が原因である時点から「かもめさへたに」に変貌してしまったと考えられるのである。「だに」ではなく「ひたすら・まるで」の意となる「ただ」とあってこそ、第四句と第五句とが無理なく噛み合うに至り、この歌はようやく本来の形を取り戻す。『評解』『全注釈』『学術文庫』が他出に言及しておきながら、この重大な異同に触れるところがないのはなぜであろうか。まったくもって解せない。

平安朝和歌における「ただ～と見ゆ」という見立ての表現は実際にはあまりない見出せないが、左に一つだけその例を掲げておこう。

京極前太政大臣、ぬのびきのたきみ侍りける時、よみ侍りける　六条右大臣

水の色のただしら雲とみゆるかなたれさらしけんぬのびきのたき

（『千載集』巻十六・雑上―一〇三七／『栄花物語』巻三十九・布引の滝―六一五）

承保三年（一〇七六）またはその前年、六条右大臣こと源顕房が、時の太政大臣藤原師実の布引の滝遊覧に随行した折の作であり、瀑布が真っ白でさながら空の白雲のように見えると詠んだ見立ての歌になっている。その他、副助

詞「さへ」＋副詞「ただ」の用例としては、和泉式部の、

このたびばかりとおもふ人にあひて、むねをしぬばかりやみて、をりしもあはれなりしことなどかきてやる

逢ふ事はさらにもいはずいのちさへただこのたびやかぎりなるらん

（『和泉式部続集』三九二／『続後撰和歌集』巻十三・恋―八四二／『万代和歌集』巻十一・恋―二一九五）

が見出せる。

以上を踏まえて一首の復元本文を掲げ、およその歌意を記すならば、

◎祈りくる風間と思ふをあやなくも鷗さへ**ただ**波と見ゆらむ

〔念願が叶っ（てやっと訪れ）た風（の絶え）間だと（うれしく）思うのに、それを無にするかのように、何だって鷗までもがまるで（白い）波同然に見えているのだろう〕

となる。『学術文庫』はこの歌を、「歌枕も和歌的技巧も詠み込まれていない鷗の歌を子供の作に仕立てている」と評しているが（波線部）、れっきとした見立ての歌であり、的外れなコメントといわざるをえない。

なお、わが国のもっとも権威ある国語辞書『日本国語大辞典』は、「さへだに」を立項している。先に掲げたような中世末期以降の用例が確かにあるので、そのこと自体に何ら問題はないのだが、語義を「（副助詞の「さえ」と「だに」

とが重なったもの）…までも」と説明し、『土佐日記』本例をその用例＝根拠として挙げているのは失態もはなはだしい。良い子が真に受けるといけないので、語義を「…でさえ」ないし「…ですら」に訂正したうえで、一刻も早く用例の入れ替えを行うべきだろう。

【校異】

ナシ

二

【本文】

これをみてむかしのこのは、かなしきにたへすして　なかりしもありつ、かへるひとのこをありしもなくてくるか、なしさといひてそなきけるち、もこれをき、ていか、あらむかうやうのこともうたもこのむとてあるにもあらさるへしもろこしもこ、もおもふことにたへぬときのわさとか　（二月九日条・九七頁三行～九八頁三行）

【諸注の解釈】

×こんな歌や、またひろく歌を詠むといふことは、何も好きだからやるといふわけでもないのだらう。／「こと」の解

釋がむづかしい。「こと」はときどき故事や古詩歌をさしていふし、このすぐ後に、「もろこしもここも……」とあるので、「なかりしも」の歌の前に亡兒を追懐する古詩の一節でも引いてあれば「かういふ詩や歌を作ることも、何もすき好んでやるといふわけではなからう。唐でも日本でも、詩歌といふものは、もの思ひを抑へきれないとき、人がするわざとか聞いてゐる」の意となつて、毛詩序や古今假名序などとも關係づけられ、何の問題もないのであるが、あひにく「もろこし」に對應すべき詩句があげてないので、「かうやうのこと」が何をさすのか、はつきりしないのである。橘純一氏は、最初、貫之が「かうやうのことも」と書いてから、考へなほし、「ことも」三字に抹消の印をつけて「うたも」と書き改めたのが、定家たちが寫す頃には、抹消符が不鮮明になつてゐたため、きづかず「こともうたも」と寫してしまつたのだとされる。たいへん鋭い着眼で、解釋もすらりと行くが、それを支持する本文證迹がないのを遺憾とする。もつとも、單に現存本どほり解釋するならば「かうやうのこと」は子供を失つて悲歎する事となり、「うた」は、歌をよむ事となるが、それでは「好むとて……もろこしもここも」とのつづき工合がどうにも落ち着かない。萩谷氏は、毛詩序の（中略）を引いて、「こと」が「嗟歎」に、「詠歌」は「うた」に當るとされる。しかし、毛詩序の文は、表面に出てゐないのであるから、それを想起してもらつて後、これが何に當ると考へさせるのは、文章として無理でもあり拙劣でもある。殊に、表むきの著者は女性なのであるから、漢籍の本文をわざわざ頭におかねばならぬやうな表現を、貫之がさせるであらうか。私も明解は持ちあはせてゐないが、假に「かうやうのこと」は「無かりしも……」の歌を、また「歌も」はひろく和歌ぜんたいをさすものと解してみた。「こんな悲しい歌をよむことも、また一般的に歌をよむといふことも、好きだからするのではなく、よまずにゐられなくてよむのだ」の意である。

（『評解』口譯／語釋）

×このように亡児を慕い嘆くということも、またこのような内容の歌をよむということも、何も好きだからということで、するというわけのものでもあるまい。「かうやうの」は、「こと」と「うた」との両方にかかるか。

（『大系』頭注）

×このような亡き子を慕い歎くことにしても、そういう歌にしても、好きだからと言ってできるわけのものでもありますまい。／「ことも歌も」の「も」は並列の助詞。「かうやうの」はその二つにかかる。「こと」は事がらの意。

（『角川文庫』現代語訳・脚注）

×このように泣き悲しむことも、歌を詠むことも、わざととってつけてできることではありますまい。／根幹諸本の本文には異同がないのであるが、「かうやうのことも」が不可解であつた為に、諸註にはいろいろこのところの本文を疑つてかかつて、種々の改訂を試みてゐるものが少くない。実隆本系統の末流諸本、妙寿院本、宇万伎本、考証、舟の直路、燈、解などの諸註は、「ことも」「うたも」の「も」を省いてゐる。創見は折角正しい本文を用ゐながら「諸本かうやうのことうたこのむとてあるにしもあらざるべし、と有るに従ひて二つのも字はぶくべし。上のも文字は調をさまたげ下のも文字は義をなさず」といつてゐる。橘純一氏も定家本を用ゐてゐながら「愚按『ことも』は恐らく衍。蓋し原本『ことも』と書いたのを『うたも』と改めたのが二つながら写されてしまつたのではなからうか」（要註国文定本総聚「土佐日記」七四頁）といふ風に思ひ迷つてゐられる。但しここは本文通りに解釈すべきであつて、何の誤衍もないのである。（中略）扨、毛詩序に（中略）と見えてゐる。これを以つて土佐日記を測る時は、「詠歌」に対する「嗟歎」が「歌も」に対する「かうやうのこと」に相当してゐると考へられないであらうか。即ち土佐日記のこの部分における「かうやうのこと」とは、「歌」となつて形にあらはれる以前の「嗟歎」即ち「泣

き」であり、この「嗟歎」に導くところの心中に動く「情」が子を想ふ「かなしみ」なのである。

（『全注釈』訳／釈）

×このように泣き悲しむことも、歌をよむことも、好きだからといってできることでもあるまい　（『全集』口語訳）

×このように泣き悲しむことも、こうした歌を詠むことも、何も好きですることでもないでしょう。／▼かうやうの事も歌も　亡児を慕い歎くことも、それに関する歌を詠むのも。　（『旺文社文庫』現代語訳／脚注）

×亡児をしのび悲嘆するということ、それを歌によむということも、なにも好き好んでのことであるというわけではありますまい。／「かうやう」は「こと」と「うた」の両方にかかる。「かうやうのこと」は亡児を偲び嗟嘆すること。つぎに「歌も」とあるので「こと」は「言」であり、漢詩をさすとする説もあるが、この箇所は『毛詩序』や『古今集序』をふまえているので、（中略）とする萩谷氏説に従いたい。諸説まちまちの箇所であるが、北村季吟以来の論を理解すればおのずから解決がつく問題である。　（『学術文庫』現代語訳／注）

×こういうように亡き子を思うことも、歌をよむことも、すきだからというのでするのでもないでしょう。／▼かうやうのこと――「なかりしも」の歌によまれているようなこと。▼あるにも……あるのでもないであろう。わざわざすることでもなかろう。　（『譯注と評論』訳文／注解）

×▼かうやうのこと　「悲しきにたへずして」「泣きける」を指す。人生の悲しさを嘆き泣くこと（下略）。／もの好きで感じたり詠んだりするものではなかろう。　（『集成』頭注／傍注）

×このように死んだ子を恋い慕って嘆くということも、歌にしても、よみたいからと言ってできるわけのものでもないでしょう。　（『講談社文庫』現代語訳）

×▼かうやうのこと　亡児を慕って嘆いたり歌詠したりすること。▼あるにもあらざるべし　出来るわけのものでもあるまい。（『新大系』脚注）

×こういう詩も、歌も、ただ好きだからとて作るというものでもなかろう。／「かうやうのこと」は亡児を思って嗟嘆することとするのが通説。だが「こと」は当然あってもよい「父」の詩句をも想定しているとすれば、詩歌の一般論を述べたことになり、次の「唐もここも」に正しく照応する。（『新全集』口語訳／頭注）

×このように亡き子を偲び嘆き悲しむことも、その思いを歌に詠むことも、何も好きこのんでしているわけではないでしょう。（『ビギナーズ』通釈）

×このように嘆き悲しむ事も歌を詠む事も、好きで出来るわけでもないだろう。／（上略）『毛詩』序と『古今集』仮名序の主張を踏まえ、「和歌のことば（→詩的言語）」の生成を、『土佐日記』は亡児の母の嗟歎の感情に見る。「うた」の語源の一つに「訴う」が想定されるように、激情の迸り発動が、「日常のことば（→散文）」を、「和歌のことば（→詩的言語）」に変成させるというのである（下略）。（『新編』脚注／補注）

【批評】

本節の不審な箇所は二つある。一つは、「うたも」の「も」で、諸注はこれを、「かうやうのことも」の「も」と対をなす並列の係助詞と解釈しているのだが、問題はそこにある。従来行われて来た「かうやうのこと」が和歌と対比される漢詩を指すとする説は、一見「も」が並列の用法に適って落ち着くかに見えるが、実際に亡児の母が詠んだ「なかりしも」歌に「對應すべき詩句があげてない」（『評解』二重傍線部）以上、到底従える説ではない。一方、「かうや

うのこと」を幼子の死を悲しみ嘆くことと解く〝通説〟も、そもそもその種の「嗟歎」（『全注釈』）を、常日頃好んでする人間なんぞあろうはずがないわけだから、後文「とのつづき工合がどうにも落ち着かない」（『評解』二重傍線部）という以前に、この前提に照らしてすでに論外といわざるをえない。無論、『毛詩』序（＝『詩経』大序）や『古今集』仮名序の出る幕はどこにも用意されていないのだ。となれば、並列の「も」自体を〝元凶〟と考えるほかないのではなかろうか。

さて、二つ目は、「とてあるにも」の「ある」。これを正確に訳出するなら、そのまま「あるというわけ」（『学術文庫』二重傍線部）「あるの」（『譯注と評論』二重傍線部）となるはずだが、困ったことに、それでは意味がうまく通じない。そこで、諸注、「やるといふわけ」（『評解』）「するというわけのもの」（『大系』）「できるわけのもの／出来るわけのもの」（『角川文庫』『講談社文庫』『新大系』）「できること」（『全注釈』『全集』）「すること」（『旺文社文庫』）「するの」（『譯注と評論』）「感じたり詠んだりするもの」（『集成』）「作るというもの」（『新全集』）「出来るわけ」（『新編』）と、さまざまな訳を捻り出して何とか文意を通そうとしているわけだが、これらがすべて原文の「ある」に対応する現代語にはなっていないのは明らかであり、解決困難な問題が生じることになるのである。

【本文改訂案】

ここもまた、「ここは本文通りに解釈すべきであつて、何の誤衍もない」（『全注釈』波線部）といった囚われから己を解き放ち、青谿書屋本以下現存主要諸本本文への過度な依存姿勢を改めないかぎり、未来永劫読解不能な箇所なのである。「本文證迹」（『評解』波線部）の有無に縛られ、現状のままどう足掻いてみてたところで、「おのずから解決

がつく問題」（『学術文庫』波線部）ではないのだ。

そこで先の二点。第一点目は、「うたも」の「も」なのだが、まずはこれを「を」の誤写だと認めなければならない。すると、前後の本文は「うたをこのむ」となり、「歌を愛好する」の意だと解釈できるようになる。底本の字母は「毛」だが、「を（遠／越）」と「も（毛／茂）」の字形は酷似しており、両者の交替は書写上しばしば起こる現象だといってよい。作中にその実例を求めると、たとえば、正月十八日条の「あるひと」の歌、

いそふりのよするいそにはとしつきも（毛）いつともわかぬゆきのみそふる　（五四頁四行～五行）

を挙げることができる。この歌の第四句「としつきも」の「も」は、定・日・宮・三・近では「を」となっている。字母は定・三「遠」・日「越」で、これは「を（遠／越）」が「も（毛／茂）」に誤られたケースといえる。

ついで、第二点目は、「あるにも」の「あ」で、こちらは「す」の間違いだと断じてよい。字母で示すならば「数」→「安」。「とてある」のではなく「とてする」のである。念のため用例を示せば、

・男もすなる日記（にき）といふものを、女（をむな）もしてみむとてするなり。　（『土佐日記』冒頭文・一五頁三行）
・いとあやしけれど、〈おのれ着む〉とてしたりつるなり。　（『落窪物語』巻一・五一頁八行～九行）
・〈子などあれば〉と思ひて、「ただにやは」とてしたるなりけり。　（同巻四・三三七頁一行～二行）
・あざやかに清らなる装束をかへて着せむ。豊かに飽き満てむ、とてすること

（『うつほ物語』吹上巻・(1)―三七九頁一一行～一二行）

・さりとて院にあらむとてすれば、過ちもして寄せられぬやうに、上たちも思すべし。

（同蔵開上巻・(2)―四三四頁一二行～一三行）

など（ちなみに、『土佐日記』の有名な冒頭「男も」の「も」が「の」の誤りであることは、拙稿「『土佐日記』誤写考――〝貫之自筆本〟本文を疑う――」において述べた）。

さて実のところ、「す（数）」→「あ（安）」もしくはその逆の本文転化は、『土佐日記』主要諸本間においても複数回、最低三箇所は確認できる。今それらを、いずれがもとかの議論は措いて、青谿書屋本に拠って挙げてみよう。

①かみなかしもゑひあ（安）きていとあやしくしほうみのほとりにてあされあへり

（十二月二十二日条・一九頁一行～三行）

②かくあ（安）るうちに京にてうまれたりしをんなこくにゝてにはかにうせにしかは

（十二月二十七日条・二三頁五行～七行）

③まねへともえまねはすかけりともえよみす（数）ゑかたかるへし

（正月十八日条・五六頁一行～三行）

右三例のうち、①「ゑひあき」の「あ」は、日・宮・三で「す」（近は「過」）、字母は定「安」、日・三「寸」。②「かくある」の「あ」は定で「す」、字母は定「数」、日・三「安」。③「よみすゑ」の「す」は、宮・三・近で「あ」、字

母は定・日「寸」、三の字母は「安」である。

以上を踏まえて一首の復元本文を掲げ、およその歌意を記すならば、

◎かうやうのことも、歌**を**好むとて**す**るにもあらざるべし。

〔このような作歌とて、（何も）歌好きだからという理由でするのでもないのだろう〕

となる。「かうやうのこと」とは、二月七日条の、

かかるあひだに、船君の病者、もとよりこちごちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり。かかれども、淡路専女の歌にめでて、みやこ誇りにもやあらむ、からくして、あやしき歌ひねり出だせり。

（四七頁二行～五行）

同様詠歌行為を指しているのであって、愛児の死を「泣き悲しむこと」（『全注釈』『全集』『旺文社文庫』）でも、「父」の詩句をも想定している」（『新全集』）表現でもなかったのだ。さらに、後続の一文は、普段好んで歌を詠むわけではない人間でもよくよくの折節には感情を韻文化する理由について、それが遍く人間の「思ふことにたへぬ時のわざ」だからだとか、という解説になっているわけである。

前節の対象も本節のそれも、青谿書屋本のみならず〝貫之自筆本〟に淵源する現存主要伝本が等しく抱え持つ不審

本文であった。そして、作者紀貫之がかかる奇矯な、破綻した表現をあえて用いたとは考えられないので、これらは貫之自身をも含む書写者たちの過失に起因する傷以外の何ものでもないということになる。ゆえに、今後はその点によくよく注意してこの作品に向き合う必要があろう。あの『土佐日記』とて、決して例外ではないだ。

【校異】

ナシ